〔書評〕

森野正弘著『源氏物語の音楽と時間』

沼尻利通

森野正弘氏の『源氏物語の音楽と時間』が出版された。喜ばしいことである。

森野氏の著作は、一九九九年に國學院大學大学院研究叢書の一冊として『源氏物語の表現構造の研究―音楽関連描写における主題の展開―』が出版されている。この叢書の冒頭に書かれた発刊の辞によると、課程博士の学位論文の中でも、特に優秀なもので、公表することにより学界への働きかけが期待できるものに限られているという。ただ、残念なことに、一般書店の販売ルートにはのらず、國學院大學生協の片隅で細々と販売されているにすぎない。当然、書評として取りあげられることはない。森野氏の前著が出された時、私は大学院生で、課程博士論文などは夢のまた夢であった。ただ、課程博士論文を書く意志は強くあったために、森野氏の著作を何度も読み直し、課程博士論文とはかくも高い壁であるのかと痛感した記憶がある。理論の切れ具合、言葉づかいの的確さ、緻密な論理構成など、多くを学んだ。その当時、大学院の中古文学の分野では、森野氏は課程博士の第一号であった。その後に続くべく、後輩たちは、課程博士論文のお手本として、森野氏の著作を何度も読み直したものである。

今回の『源氏物語の音楽と時間』では、前著『源氏物語の表現構造の研究』におさめられた論文の七本が収載され（未収載のものは、「〈薫の物語〉と弁の君の昔物語―物語空間としての宇治―」のみ）、それだけでなく十一本の論文も新たに加えられている。前著を多少水増ししたレベルのものではなく、新しい論文も収載され、さらに再編集されているため、堂々たる新著と言える。

『源氏物語の音楽と時間』の構成は、三編一八本の論文で、次の通りとなる。

【第一編】昔（むかし）という時間／古（いにしへ）という時間―『伊勢物語』における虚構の方法―、『伊勢物語』二条后章段における時間の構造、○紫の君と雛遊び・絵／箏の琴、時間に遅れる光源氏―『伊勢物語』への遡行と反復―、薫物合せにおける季節と時間

【第二編】○頭中将と和琴／光源氏と琴の琴、○明石入道と

琵琶法師、明石一族における箏の琴の相承―小一条家との相関―、○玉鬘と和琴―六条院文化の形態変化―、○紫の上と和琴―言語空間としての六条院の女楽―、柏木の横笛にまつわる逸話の諸相、○宇治姉妹と箏の琴

【第三編】明石の君と歌人伊勢、○化粧する光源氏／目馴れる紫の上、組織化される夕霧の浮遊性、女三の宮の花の履歴、六条院のシステム分化―明石の君の位相領域―、物語の語り―『源氏物語』橋姫巻の方法―

第一編は「時間の表現と構造」、第二編は「音楽の表現と構造」、第三編は「物語の表現と構造」と区分されている。この区分が物語るように、「時間」「音楽」「物語」のそれぞれの表現と構造が論じられている。なお、○印を付したものは、前著『源氏物語の表現構造の研究』に収載されたものである。

第一編では、伊勢物語の時間構造の究明から、源氏物語への時間構造のシステム論的な展開をみせる。第二編は、源氏物語における音楽をめぐる表現を、テクスト論的語脈読みの方法により明らかにするものや、文化的な文脈により究明する論をおさめている。第三編では、物語自体を相対化する、物語の方法を究明する論を主軸にして構成されている。整然と論理的に「時間」「音楽」「物語」が、それぞれ論じわけられ、おのおの独立しているかのように見えながらも、編同士が緊密に連絡しあい、まさに「物語」の「時間」と「音楽」が論じられている。

森野氏の論文を読むと、おおまかに二つの方法論を使い分けて論じていることに気付く。一つはテクスト論的語脈読みの方法である。一つのキーワードに執し、その意味の連鎖や隔絶により意味を立ち上げていくという方法である。ただし、ルールとしては「作者」という視座を入れずに、構造化されたキーワードとして作品を読み解くという立場である。いま一つは、文化史的視座による方法である。音楽に関する外部資料を用い、それによって文化史での文脈を確認したうえで、それを物語に取り込んでいくという方法である。

これら二つの方法を使い分けることは、いささか危険さが伴う。テクスト論は、言うまでもなく「作者」という文脈を敢えて切り離し、作品のみの自律性のもとに論じようとするところに特徴がある。ところが、その「テクスト」とは「織物」を意味する。「織物」はさまざまな糸を縒り込むことによって構成されている。「織物」は、「言葉」という糸を縒り込むことを許容することと同時に、「文化」という糸を縒り込むことをもしばしば許容する。そうであるなら、「文化」という糸を縒り込むが如く、「作者」という糸を縒り込むことも可能となる。若い時には作者論を排斥していたはずの先鋭的なテクスト論者が、晩年には作者論に回帰することがままあるように、または作者を問題としないと表明していた人間が、なぜか作者を語ることがあるように、尖りすぎたテクスト論は、しばしば返す刀となってテクスト論自体を傷つけることがある。テクスト論を選択した研究者は、「作品」を読みたいために研究をするのであって、作者を知りたいために作品を読むのではない。もちろん、作者を知りたい人は、その立場で存分に研究をすればよい。しかし、テクスト論の立場とは、作者が作品を書くのではなく、作品が作者を作りだす、という、一種の転倒しているかのように見える立場にこそその意義がある。なお、蛇足であるが、文学研究の方法論とは、

あくまで立場の問題であり、正否の問題ではない。したがって、テクスト論が正しい（間違っている）、作家論が間違っている（正しい）という議論にはなりえない。文学の方法論では、正否は問題とはならず、その有効性のみを問題とすべきである。敢えて「作者」を切り離すことによって、これまで見えてこなかった作品独自の文学性をあぶりだすことができるところに、テクスト論の醍醐味と意義がある。

森野氏は、そうしたテクスト論の立場を自覚したうえで立論している。したがって、「文化」や「音楽史」という文脈は取り入れるが、そこに「作者」という文脈を取り入れることは決してない。「作者」という文脈を取り入れてしまったならば、もはやテクスト論ではなく、読書感想文に堕してしまうからだ。森野氏の論文は、明確すぎるほど明確な方法論に裏打ちされているため、清々しささえ感じられる。読んでいて気持ちのよい論文ばかりである。

ただ、いささか気になるところも散見されたので、ここで述べておきたい。

一つ目は、「時間」に関する論考である。第一編、『伊勢物語』の「時間」が論じられているところ。物語の時間構造が循環的なものとなっており、歴史の直線的な時間構造とは一線を画すると結論づけている。これはこれで納得でき、論証にも大きな瑕疵はないのであるが、いささか既視感のある結論である。『古今集』の在原業平の歌を分析した田中元は、業平の歌には、時間構造が直線的なものもあるが、しかし超時間的な、過去も現在も融合した時間を示すような性格のものが確認できるとしている（「十世紀初頭まで―『日本霊異記』『古今集』―」『古代日本人の時間意識―その構造と展開―』吉川弘文館　一九七五年）。田中元も指摘しているように、時間構造を直線的なものと循環的なものに峻別することは、既に平野仁啓によりなされている（「古代日本人の時間意識の展開」『続古代日本人の精神構造』未来社　一九七六年）わけで、どうしてこれらの「時間」をめぐる研究史を示した上で論証をすすめなかったのか、いささか疑問に感じた。「時間」をめぐる研究史は、文学史のみならず文化史も視野におさめると、かなり分厚いものがあるため、煩雑さを避けたのだろうし、田中論文も、『古今集』の業平歌を問題としたもので、『伊勢物語』を俎上にのせたものではないのだから、触れるに及ばないかもしれないが、かといって、まったく無視するわけにもいかないようにも思われる。むしろ森野氏の結論を補強するものなのだから（都合のよいものなのだから）、積極的に用いた方がよかったのではないかと愚考する。

二つ目は、しばしば森野氏が論拠とする『秦箏相承血脉』である。箏の琴師資相承の系図で、森野氏は群書類従本を用いている。この資料については、『図書寮叢刊　伏見宮旧蔵楽書集成二』（宮内庁書陵部　一九九五年）が出版されているのだから、こちらを用いるべきである。図書寮叢刊の底本となった伏見宮旧蔵本は、群書類従本の「祖本とみられる善本」（一九頁）と評価されている。また群書類従本では実線となっている系図の線が、伏見宮本では実線と朱線に使い分けられているとして、朱線を点線として表示するなど、工夫がこらされている。この本の『秦箏相承血脉』解題では、南朝の人物が書かれておらず、注記も整備されており、おそらく後小松院あたりの時期に成立したと推測されている。楽書については私は門外漢であるが、他の楽書関連の資料では、森野氏の論理はどうなる

のか、疑問が残った。森野氏は『河海抄』の箏相承系図を、『秦箏相承血脉』を「要約したもの」（一九七頁）と推測している。『河海抄』は貞治年間に足利義詮に献上されたといわれる。もちろん『秦箏相承血脉』のもととなる系図なり伝承はあったことは否定しないが、後小松院のあたりに成立したとされる『秦箏相承血脉』は、まだ作成されているかどうかは微妙なところであろう。

そもそも、平安時代に成立した源氏物語の読解をめぐる資料で、南北朝期から室町にかけての資料を用いて論じるというのでは、平仄が合わない。もちろん、資料の限界というのは常につきまとうものだから、次善の策として後世の資料を使わざるを得ないことはある。そのさいには、論述でそのように断りをいれるべきである。しかし、森野氏の論述には、資料についての説明はさほどなされない。知識のない私のような読者としたら、いきなりある資料が論拠として無造作に用いられるのであるから、それは平安時代か、あるいは院政期あたりの成立の資料なのか、などと勝手に誤読してしまう恐れもある。そのような誤読を誘う意図がないのであれば、資料の成立年時などは簡単に触れて欲しい。なにも楽書研究の長口上を聞きたいのではない。さらっと「南北朝期末成立の『秦箏相承血脉』によれば…」と一言加えれば良いだけである。専門書ではあるが、そういう配慮をしていただきたかった。

三つ目は、「明石一族における箏の琴の相承」という論文での、本文の取り扱いである。この論文では、本文の異文が問題となっており、森野氏が底本とする新編全集（小学館）で、「延喜の御手より弾き伝へること三代になんなりはべりぬるを」（「明石」二二二四二頁）とあるところが、大島本を底本とした新大系（岩波書店）では「延喜の御手より弾き伝へたること四代になんなり侍ぬるを」（二一六六頁）とあり、森野氏は、この論文では、敢えて大島本を底本とする新大系の「四代」を採用して解釈したのである。この大島本の「四代」は独自異文であり、池田亀鑑の分類するところの青表紙本の他本や河内本、別本などはすべて「三代」である。

ただ、この「四代」は、私には単純な誤写としか考えられない。大島本の該当箇所（一九丁ウ六行目）を見ると、字母では「志多以」となっている。右傍らには「三イ」との異文注記が付されている。この「志」はかなり崩されており、「士」は直線二本が近接し癒着し、「心」が直線状になっている。「三」と見間違いやすいのである。ぱっと見では「三」としてもおかしくはない。この書写者は「し」の「志」を書くさいには、横棒を直線状にして癒着する癖があるらしく、同じ丁の一行目と九行目にも、ほぼ同じ形の「志」が描かれている。ただし、「志」の「心」を波打たせる場合もあり、九行目の最終文字では、波打たせた「志」が書かれる。この書写者の「志」は、横棒三本の「三」に見間違える可能性が高い。大島本「明石」巻には、漢字の「三」の用例は三例ある（一二丁オ二行目、二九丁ウ九行目、三三丁オ四行目）。これらは、「三」の直線がそれぞれある程度離れているために、漢字であることは明らか。ただ、二例（二九丁ウ、三三丁オ）で、二本目の直線と三本目の直線が連綿する癖が確認できる。大島本の親本が「三」の漢字だったものを、この書写者が「志」と誤って写した可能性は高い。大島本をあるがまま活字化する方針の新大系だから「四代」と活字化したわけだが、他本で一例も「四代」が確認できない以上は、ただの誤写として処理することは、ごく普通のことで、新編全集などの活字本文の建て

方は穏健な処理と判断できる。そもそも、大島本の書写者の書く字母の「志」は「三」と紛らわしい。大島本の書写態度は、厳密なものではなく誤写や誤脱が多いとの伊井春樹の指摘（「大島本『源氏物語』本文の意義と校訂方法」『源氏物語論とその研究世界』風間書房　二〇〇二年）も併せて考えるに、ここは大島本の「三代」の誤読誤写と素直に読んだ方が良さそうなところである。最近の大島本の研究では、大島本はひとまとまりの本ではなく、幾種類かの取り合わせ本として考えるべきであるとされる（佐々木孝浩「「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察」中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院　二〇〇九年）。森野氏が大島本について述べた「最善本とされる飛鳥井雅康等筆本（大島本）」（一九六頁）という認識は、現在の大島本の研究ではふさわしいものではなくなっている。いわゆる写本の世界観を見るという論法で、「大島本の本文世界」として「四代」をクローズアップすることも考えられようが、大島本がそこまで物語内容にこだわりを持って書写されたとするには、いますこしの論拠が求められる。すくなくとも大島本の享受者（あるいは書写者自身）が「三」の異文注記をしていることを考えると、「四代」として読まれた享受のありようがあった、とする論法も通じそうにない。他本で「四代」とするものがあり、その本文がある程度に流布をしたことが確定できれば、「四代」として読まれたとする享受史からの立論の可能性もあろうが、そういう本文は報告されていない。工藤重矩「源氏物語の本文校訂と解釈―一つの伝本を尊重する読みをめぐって―」（『源氏物語　読みの現在　研究と資料』古代文学論叢第二〇輯　二〇一五年）でも述べられているように、単純な誤写を、ことさら「本文世界」と言いたてることは危険である。この場合、森野氏は、いたずらに「四代」を言挙げするのではなく、単純な誤写という視座に依りつつ論を展開していかれた方が良かったのではないかと、私には感じられてならない。

以上、重箱の隅をつつくような、揚げ足とりを三点述べてきたが、もちろん、これにより森野氏の論理は揺るぐことはない。論証の手堅さと、緻密な論理構成、何よりも方法論の確かさは、他の追随を許さないものがある。

最近の大学生や大学院生などの若い人を見ていると、文学研究の方法論に無自覚なまま、立論をする学生が多い。文学研究の方法論が、理論だけ空転、蛸壺化したからといって、あまり深く学ばないまま、何となく文学を論じている気になるとしたら、それは文学研究の堕落にほかならない。方法論と感性の融合が文学研究である。確かな方法論によって、着実な理論の展開と感性の閃きを見せる、森野氏の『源氏物語の音楽と時間』は、多くの若い学生に読んでもらいたい本である。またその背中から、多くを学ぶべき本である。

（『源氏物語の音楽と時間』新典社、二〇一四年九月刊、四九四頁、一四二〇〇円＋税）

（ぬまじり・としみち）